九州産業大学国際文化学部紀要　第28号〔15〕－〔25〕(2004)

梅花歌三十二首考

呉　英海
金原　理

一、

周知の通り『万葉集』巻五には、天平二年大宰帥大伴旅人の官邸で開かれたとされる、梅花宴の際に披講された漢文の序と三十二首の和歌が載せられている。やや長くなるが後述の便のために全文を掲げる。

梅花歌卅二首　　并序

天平二年正月十三日、萃于帥老之宅、申宴会也。于時、初春令月、気淑風和。梅披鏡前之粉、蘭薫珮後之香。加以、曙嶺移雲、松掛羅而傾蓋、夕岫結霧、鳥封穀而迷林。庭舞新蝶、空帰故鴈。於是、盖天坐地、促膝飛觴。忘言一室之裏、開衿煙霞之外。淡然自放、快然自足。若非翰苑、何以攄情。請紀落梅之篇、古今夫何異矣。宜賦園梅、聊成短詠。

正月立ち　春の来らば　かくしこそ
梅を招きつつ　楽しき終へめ
大弐紀卿（5、八一五）

梅の花　今咲けるごと　散り過ぎず
我が家の園に　ありこせぬかも
少弐小野大夫（5、八一六）

梅の花　咲きたる園の　青柳は
縵にすべく　なりにけらずや
少弐粟田大夫（5、八一七）

春されば　まづ咲くやどの　梅の花
ひとり見つつや　春日暮らさむ
筑前守山上大夫（5、八一八）

世の中は　恋繁しるや　かくしあらば
梅の花にも　ならましものを
豊後守大伴大夫（5、八一九）

梅の花　今盛りなり　思ふどち
かざしにしてな　今盛りなり
筑後守葛井大夫（5、八二〇）

青柳　梅との花を　折りかざし
飲みての後は　散りぬともよし
笠沙弥（5、八二一）

我が園に　梅の花散る　ひさかたの

天より雪の　流れ来るかも
主人（5、八二二）

梅の花　散らくはいづく　しかすがに
この城の山に　雪は降りつつ
大監伴氏百代（5、八二三）

梅の花　散らまく惜しみ　我が園の
竹の林に　うぐひす鳴くも
少監阿氏奥島（5、八二四）

梅の花　咲きたる園の　青柳を
縵にしつつ　遊び暮らさな
少監土氏百村（5、八二五）

うちなびく　春の柳と　我がやどの
梅の花とを　いかにか別かむ
大典史氏大原（5、八二六）

春されば　木末隠りて　うぐひすぞ
鳴きて去ぬなる　梅が下枝に
少典山氏若麻呂（5、八二七）

人ごとに　折りかざしつつ　遊べども
いやめづらしき　梅の花かも
大判事丹氏麻呂（5、八二八）

梅の花　咲きて散りなば　桜花
継ぎて咲くべく　なりにてあらずや
薬帥張氏福子（5、八二九）

万代に　年は来経とも　梅の花
絶ゆることなく　咲き渡るべし
筑前介佐氏子首（5、八三〇）

春なれば　うべも咲きたる
梅の花　君を思ふと　夜眠も寝なくに
壱岐守板氏安麻呂（5、八三一）

梅の花　折りてかざせる　諸人は
今日の間は　楽しくあるべし
神司荒氏稲布（5、八三二）

年のはに　春の来らば　かくしこそ
梅をかざして　楽しく飲まめ
大令史野氏宿奈麻呂（5、八三三）

梅の花　今盛りなり　百鳥の　声の恋しき　春来るらし
少令史田氏肥人（5、八三四）

春さらば　逢はむと思ひし
梅の花　今日の遊びに　相見つるかも
薬帥高氏義通（5、八三五）

梅の花　手折りかざして　遊べども　飽き足らぬ日は
今日にしありけり
陰陽帥磯氏法麻呂（5、八三六）

春の野に　鳴くやうぐひす　なつけむと

我が家の園に　梅が花咲く
算帥志氏大道（5、八三七）

梅の花　散り紛ひたる　岡辺には
うぐひす鳴くも　春かたまけて
大隅目榎氏鉢麻呂（5、八三八）

春の野に　霧立ち渡り　降る雪と
人の見るまで　梅の花散る
筑前目田氏真上（5、八三九）

春柳　縵に折りし　梅の花　誰か浮かべし　酒坏の上に
壱岐目村氏彼方（5、八四〇）

うぐひすの　音聞くなへに　梅の花
我家の園に　咲きて散る見ゆ
対馬目高氏老（5、八四一）

我がやどの　梅の下枝に　遊びつつ
うぐひす鳴くも　散らまく惜しみ
薩摩目高氏海人（5、八四二）

梅の花　折りかざしつつ　諸人の
遊ぶを見れば　都しぞ思ふ
土帥氏御道（5、八四三）

妹が家に　雪かも降ると　見るまでに
ここだも紛ふ　梅の花かも
小野氏国堅（5、八四四）

うぐひすの　待ちかてにせし　梅が花
散らずありこそ　思ふ児がため
筑前掾門氏石足（5、八四五）

霞立つ　長き春日を　かざせれど
いやなつかしき　梅の花かも
小野氏淡理（5、八四六）[注1]

天平二年（七三〇）正月十三日、大宰帥大伴旅人の官邸においてこのように盛大な梅花の宴が催された。集った人々は大弐以下の官人二十一名、大宰府管轄内である九国三島の諸国から国司等十一名、合わせて三十二名が名前をみせている。これだけ多くの人数による歌宴は万葉を始め、上代の文献においてほかに見られないことから、この「梅花宴」の宴会の規模や趣向などについて、従来から先行研究者によって高い評価が与えられている。

中西進は

旅人が蘭亭の序のまねをして序を書いたということは何も文章を借りたのではなかった。隠逸の心を羲之に合わせようとしたのであり、その暗示が文章の模倣だったのである。旅人が大宰府へ来たのは半ば敬遠されたからである。全くの流謫というのではないが、体のよい追放は彼自身十分理解していたところであり、古来「隠流」といわれるも

ののひとつである。その時の心境として世俗的に人事を憤ることもあろうが旅人はそうしない。他の、たとえば日本琴の作品から知られるように端然と姿を崩さず、世俗を超越するのが旅人の常であった。その意味で王羲之は仰ぐべき先人であり、その蘭亭の詩会はまねるにまことにふさわしい韻事であった。旅人が梅花の歌会を催した理由は、ここにあった。[注2]

と説く。

辰巳正明[注3]は「梅花歌三十二首」の序文が六朝風な漢文であるとした上で、この歌群に望郷の念が強く汲み取れることを主張し、主人の大伴旅人の趣向によって開かれたこの歌宴が「梅花の宴」であることにより、三十二人の出席者たちが楽府「梅花落」を意味することを理解した前提で開かれたと評価している。

また林田正男[注4]は「梅花三十二首」の歌群が「三十二首の歌は特にすぐれたと思われるものもなく、内容も形式的であると評されるが、それぞれ漢文学の素養を巧みに和歌に生かしていること、多数の歌人たちの雅筵が開かれその詠歌をのこすことなど大宰府の文学を代表すると同時に文学史的にも大きな意義を持つというべきである。」と述べられる。いずれの先行研究も「梅花宴」歌三十二首が六朝風な漢文の序を持つこと、また歌が長大な歌群として存在する事などに注目して、このことこそ宴席歌として評価されるべきことだと説いているのである。

二、

冒頭の漢文序文が示すように、天平二年（七三〇）正月十三日、大宰府の旅人邸で盛大な宴が催された。参会した九州の治政の要人たちは咲き匂う梅の花を歌題にして、それぞれが「梅花の歌」を披露した。それに先だって主人旅人が挨拶のかわりに作り上げたのが「序文」である。

この「梅花宴」の漢文序文については契沖が『万葉代匠記』で王羲之の「蘭亭集序」に倣ったものであると指摘して来ているのは周知の通りだが、中西進は個々の言葉の対応など、以下に挙げるようにさらに詳しい指摘をしている。[注5]

（梅花の序）天平二年正月十三日、萃于帥老之宅、申宴会也。于時、初春令月、気淑風和…

（蘭亭の序）永和九年、歳在癸丑、暮春之春、会于会稽山陰之蘭亭、修禊事也。…是日也、天朗気清、恵風和暢、…

（梅花の序）忘言一室之裏、…快然自足。…

（蘭亭の序）悟言一室之内、…快然自足。…

の如き一致である。蘭亭の序を下敷にしたこの序文は当時、奈良の宮廷で行われた詩人、文人たちの集う詩宴を意識して作り上げたのだとされる。

『万葉集』の中に「梅花」の歌は一一八首あるが、これは「萩」の歌の一四〇首に次いで多い。とは言え巻一、二等の年代の古

い巻には「梅花」を詠んだ歌が見えないこと、つまりこの歌宴の催された天平二年以前には、「梅花」を詠歌の対象とした歌が見られないことから、都ではまだ流行するに至っていない風雅をいち早く取り入れていることに注目される。東茂美[注6]はこのことに触れて「梅は唐からもたらされたエキゾチックな花で大宰府政庁はこの梅樹を中心に庭づくりがなされていたらしい。当時渡来したばかりの梅花はまことに国際都市にふさわしい花だともいえるだろう。」と述べる。

この宴席に詠まれた三十二首の和歌はいかにも目の前の「我が園」、「我が家」の梅を鑑賞しながらの作のようにみえるが、前に見たようにほとんどここで初めて漢風的傾向の強い「梅花」が詠作の対象になっていることから考えると、目前の梅を直接に詠んだとするには問題を残すことになろう。『万葉集』に「梅花」を歌の風雅とする文雅が成立したのが、この天平二年の「梅花宴」以後であったと考えられるからである。

前掲のように辰巳正明[注7]は楽府の「梅花落」と、この「梅花宴」歌の関連を指摘している。それは以下のような事由による。

梅花落、　　梅花落
春和之候、　　春和の候
軍士感物懐帰、　軍士物に感じて帰らんことを懐ふ
故以為歌　　故に以ちて歌を為す。[注8]

を取り上げ、故郷を離れた官人や兵士たちが、梅の花が咲きそして散るのを見て故郷を懐かしむ「梅花落」の性格が、旅人以下この宴の出席した歌人たちの境遇に比定できるからだというのである。

また資料としては既に先学に指摘があるところでもあるが、中西進は盧照鄰の「梅花落」の楽府詩を以下のように具体的に読み解いて、

梅嶺花初発　　梅嶺に花初めて発き
天山雪未開　　天山に雪いまだ開けず
処々疑花満　　処々、花満つるかと疑ひ
花辺似雪回　　花の辺、雪に似て回る
因風入舞袖　　風に因って入りて袖に舞ひ
雑粉向妝台　　雑粉として妝台に向ふ
匈奴幾万里　　匈奴幾万里
春至不知来　　春至って来るをしらず

（『楽府詩集』巻二十四）

と、辺境を思う心情から散る梅をよむのは、「梅花落」の主題とかなっているのだと指摘している。[注9]

旅人は梅花の宴を催した当時、都を遠く離れた大宰府へ左遷にも近い形で追われたという失意の中にあった。こういう前提に立ってみると「梅花落」の中で歌われた故郷を離れた兵士たちの心情を、自分の立場に準えて望郷の念を込めて梅花の宴を催し、梅花の歌を詠んだのではないかという辰巳正明の推測も、

中西進の辺境を思う情詩が「梅花落」として歌われるからこそ旅人は梅花の歌会を催し、辺境の悲しみを分かち合おうとしたという主張も鋭い指摘であることが分かる。従って、こうした先行研究者の論点を視野に入れて、この宴席歌に新たな解釈を試みてみたいと思う。

三、

『藝文類聚』（巻八六・菓部上・梅）に江総の「梅花落」の詩がある。

この詩は先行研究者によって「梅花三十二首」歌の背景にある素材の一つに数えられているが、もう一度細かく読みながら、その関連を見直してみたいと思う。

㋐臈月正月早驚春　　臈月正月早くも春に驚く
衆花未發梅花新　　衆花発かざるに梅花のみ新し
梅花芬芳臨玉臺　　梅花芬芳として玉台に臨まれ
㋑朝攀晩折還復開　　朝に攀じ晩に折りて還りて復開く
滿酌金巵催玉柱　　酌みて金巵に満たし玉柱に催し
㋒落梅樹下宜歌舞　　落梅の樹下歌舞に宜し
金谷萬株連綺甍[注10]　　金谷の万株綺甍に連なり
梅花隠處隠嬌鶯　　梅花隠るる處嬌鶯を隠す
桃李佳人欲相照　　桃李佳人相ひ照らさんと欲し
摘蘂牽花来並笑　　蘂を摘み花を牽き来たりて並に笑む
㋓楊柳條青楼上軽　　楊柳の條青くして楼の上に軽く
㋔梅花色白雪中明　　梅花の色白くして雪の中に明るし
横笛短簫悽復咽　　横笛短簫悽み復咽ぶ
誰知柏梁[注11]聲不絶　　誰か知らん柏梁に声絶えずと

右のような一編だが、左に見る通り旅人の官邸での梅花歌には景物として鶯、柳、雪が織り込まれているが、この詩にそれらが素材として使われている（右の詩に傍線を施した部分）。その意味については一部指摘されてはいるが、[注12]「梅花三十二首」の中にこの漢文的な特徴である、「鶯、柳、雪」の表現が現れている歌を統計的に示すと以下の通りである。

鶯：八二四、八三七、八三八、八四一、八四二、八四五
柳：八一七、八二一、八二五、八二六、八四〇
雪：八二二、八二三、八三九、八四四

これらの統計から分かるように、ほぼ半数に近い歌の中に漢文的な素材が織り込まれている。

また上掲の詩に㋐から㋔までの記号を施したところは、それらの表現が「梅花歌三十二首」の歌の表現に近いと考えられる部分である。以下そのことを具体的に見て行こう。

㋐と共通点が見えるのは「正月立ち」、㋑に関しては「人ごとに　折りかざしつつ」、「梅の花　折りてかざせる」、「梅の花　手

折りかざして」、「梅の花　折りかざしつつ」、㋒に関しては「梅を招きつつ　楽しき終へめ」、㋓については「うちなびく　春の柳と　我がやどの　梅の花とを」、㋔については「ひさかたの天より雪の　流れ来るかも」、「降る雪と　人の見るまで　梅の花散る」、「妹が家に　雪かも降ると」等が挙げられるのである。これをまとめると

㋐：八一五
㋑：八二八、八三二、八三六、八四三
㋒：八一五、
㋓：八二六、
㋔：八二二、八三九、八四四

となる。この点をもう少し具体的に説明してみよう。㋐から㋔までの詩の表現をもう一度掲げると、㋐「臈月正月早驚春」、㋑「朝攀晩折還復開」、㋒「落梅樹下宜歌舞」、㋓「楊柳條青楼上軽」、㋔「梅花色白雪中明」のそれぞれである。

㋐は季節の表現として梅花が咲く春「正月」が挙げられていること、㋑は梅花は朝手折っても夜またすぐ開く、つまり人々が梅花を髪に挿すために枝を手折って遊ぶ様子の表現に繋がること、㋒は落梅の下はちょうど歌舞に宜しいと言う、つまり歓楽を尽くそうの意に繋がること、㋓は春の庭園の景物としてもう一つ挙げられる柳の描写が、歌の表現と一致していること、㋔は梅花の色が雪の中でも明るく、見間違えるほどに梅の花が雪に似ている、というように梅花歌との間に表現上の類似点が窺がえるのである。

一方、すでに指摘[注13]されている所でもあるが、逆に歌の方に漢詩の表現そのものを彷彿させるものがある。

例えばそれは八二三・八二五・八二七などで、それぞれ「梅花吻地落、城山雪花飄」、「梅花苑中笑、青柳垂絲絛」、「鶯隠枝頭唱春早、梅在樹下無声開」と漢訳することができるし、また主人の八二二番歌の「我が園に　梅の花散る　ひさかたの　天より雪の　流れ来るかも」は「梅園花自落、大雪涌天来」と表現できる。

こう見て来ると歌それ自身がすぐれて漢詩的で、そのことはこのように漢訳を試みることによってより明確になる。つまりこの梅花歌の宴は旅人の豊かな漢文の教養を慕って集った官人たちとの、漢文表現を巧みに活かした、和歌競作の場だったとも言えようか。

ただ、江総の詩が「梅花宴」の歌と直接にかかわるということを言おうとするには、さらに多くの手続きを必要とするだろう。表現の上での近似の蓋然性について述べたのである。

四、

振り返って序文をみたいと思う。

天平二年正月十三日、萃于帥老之宅、申宴会也。（中略）若非翰苑、何以攄情。請紀落梅之篇。古今夫何異矣。宜賦園梅、聊成短詠。

この序文の中の「請紀落梅之篇」の「請」は現代の注では「詩」という説が有力である。倉野憲司[注14]は意味内容及び後文との関連から「詩」の方が正しいとし、もし「請」であれば「請紀落梅之篇」に続いての「古今夫何異矣」の「古」が宙に浮いて無意味になるばかりでなく、次の「宜賦園梅、聊成短詠」と重複するとし、小島憲之[注15]が、初唐詩序の影響を受けたとする『懐風藻』の詩序の、

清（請の誤字）与西園之遊、兼陳南浦之送（三田三方）

請染翰操、即事形言（下毛野蟲麻呂）

という用例を根拠に、梅花歌の漢文序が初唐詩序の

請抽文律、共抒情機（王孚、江浦　観魚宴序）

の借用を思わせる充分な証拠があるとする説に、反論している。

これを受けて小島憲之[注16]は「詩」であっても序文として破綻をきたさないが、「落梅之篇」の後に続く「古今夫何異矣」のところに「請」と「詩」とのわかれる原因の一つがあり、「古」が漢籍（中国人、中国など）をさすので漢詩の出典を求めて「請」の説にしているとの説明を加えている。漢籍との比較の説明に充分な説得力があると考えられるので、冒頭の序文にも掲げたように、小島説に従って論を進めたのである。

さて、上掲倉野憲司の論[注17]に取り上げられている『玉臺新詠』所載の謝玄暉の「落梅」をみたいと思う。

新葉初冉冉、　新葉（シンエフ）　初めて冉冉（ゼンゼン）たり
初蕊新霏霏　初蕊（ショズキ）　新に霏霏（ヒヒ）たり
逢君後園讌、　君（きみ）に逢（あ）ふ　後園（コウエン）の讌（エン）（に）
相随巧笑帰　相随（あひしたがう）て　巧笑（カウセウ）して歸（かへ）る（とき）
親労君玉指、　親（みづか）ら　君（きみ）が玉指（ギヨクシ）を勞（ラウ）して
摘以贈南威　摘（つ）みて以（もつ）て　南威（ナンキ）に贈（おく）る
用持挿雲髻、　用（もつ）て持（ヂ）して雲髻（ウンケイ）に挿（はさ）み
翡翠比光輝　翡翠（ヒスキ）と　光輝（クワウキ）を比（ヒ）す
日暮長零落、　日（ひ）暮（く）れて　長（なが）く零落（レイラク）す
君恩不可追　君（きみ）が恩（オン）　追（お）ふべからず[注18]

上記の漢詩の「霏霏」の表現は、普通多くは止まずに降ってくる雪に対しての表現が多い。例えば『藝文類聚』（巻二・天部下）の「雪」には

毛詩曰：今我来斯、雨雪霏霏

楚辞招魂曰：霰雪霏霏、糅其増加

の用例がある。

旅人の和歌「我が園に　梅の花散る　ひさかたの　天より雪の　流れくるかも」はまさに「霏霏」と降る雪をもって「落梅」の世界を表わしているのである。

漢詩人でもある旅人はこの宴席での漢文序には「請紀落梅之

篇」と言い、和歌は第三章で言及したとおり、漢訳で「梅園花自落、大雪涌天来」と表現できるほど漢詩風である。

倉野憲司は旅人の「梅花歌三十二首」の序文の「落梅之篇」は、まさに謝玄暉の「落梅」の詩を指すのだと指摘しているが、上述のように旅人の八二二番の和歌にも深いつながりが見えるのである。

したがって、旅人の豊富な漢文に対する知識から、「梅花歌三十二首」の宴を催した時、倉野憲司も言っているように、旅人の脳裏に謝玄暉などの文学世界が去来したと想像することはあながち許されないことではない。

五、

この梅花歌三十二首の構成については、すでに様々な視点に立った研究がなされて来ているが、ここで一度原点に立ち返ってみようと思う。

後の文献ではあるが、旅人の官邸で「梅花之宴」が開かれた背景を知る手掛かりを与えてくれる貴重な資料がある。

それは藤原明衡が治歴二年（一〇六六）頃、編集した『明衡往来』に見える以下のような記事である。

謹上　筑前守殿

去春安楽寺曲水宴獻詩者衆。是則九州之牧。多任折桂人之故也。築州刺史當仁作都序。其文可觀。峴山之句猶可招耻歟。明年肥州可闕。若浴鴻恩被割虎符者。所羨可足。殘菊燕席可感其詞花侍。努力々々。莫望他國。厶謹言。

訓読すると

去春ノ安楽寺ノ曲水宴、献レ詩者衆、是則九州之牧（地方長官）。多任ニ折桂人ヲ（文章道の学生から省試の試験を受け合格した者）故也。筑紫ノ刺史（長官）当レ仁ニ（任か？）作ニ都序ヲ。其ノ文可レ観。峴山ノ句猶可レ招レ恥歟。[注19]

（下略）

となる。

時代は『万葉集』編纂時より下るが、この「梅花宴」に匹敵する詩会が、大宰府のように国際的に開かれた都市では行われていたことを推測させる、看過できない資料である。

これは菅原道真の祀られている安楽寺への献詩の有様を示すものであるが、都から遠く離れてはいるものの、大宰府が最も外国の文化との接触が早いという有利な地理的条件もあって、大宰府政庁では文人たちが盛んにこのような創作活動を営んだであろうことを如実に示すものである。

「梅花歌三十二首」の研究史の中の中心的課題の一つに構造と構成の論がある。

古くは土居光知に、

…三十二首の歌はあらかじめ準備してきた歌を吟詠し優劣

を判ずるのではなく、また各人が吟誦した歌を誰かが記録し、順序よく列べたものでもなく、順次に各人が一首の歌を作り、みずから書き、それを吟誦し、次の人は前歌との付き合いを考え、宴会そのものを楽しくしようということを目的とし、自分の歌を詠じたものと思われる。

『古代伝説と文学』[注20]

という説があるが、『明衡往来』の記事によればその正否は自ら明らかであろう。

『明衡往来』は万葉時代より後の資料には違いないが、大宰府という歴史的な舞台を理解するに当たって有力な資料であることは間違いない。この文献を通して大宰府官人たちの仕事ぶりが詳しく想像できるし、また「梅花宴」の歴史的背景を説明してくれてもいるのである。

ただ、「梅花歌三十二首」の構造や構成の論はその後、伊藤博[注21]、後藤和彦[注22]、植垣節也[注23]らによってきわめて精緻な論が提出され、深まりをみせている。いまそれらに新たに意見を加える用意はない。

『明衡往来』の資料も示すように大宰府では、当時、いろいろな形でこのような宴会が行われたであろうことが推測されるが、とすれば旅人ら八一五番歌から八二二番歌まで、この歌宴の前の方に歌が並べられている八人の高級官人らにとっては、このような宴会は特別なものであったとは考えにくいし、一方、大宰の帥への献歌とはいえ、歌がそれほど得意とは言えない地方官人もいないわけではないだろう。だとすると、旅人の歌を境界に前歌群の構成が優れているのは自然なことであるし、また後歌群の方は指摘[注24]されているように、連鎖的な繋がりがあるとは言え、比較的に関連が乱れているところもあること、八二八や八四六番歌に前の歌との繋がりがみえないことなど、拙劣なところが見えるのも致し方のないことだろう。

六、

この「梅花歌三十二首」は、『万葉集』に残されている宴席の歌のなかにあって三十二首にも及ぶ多数の歌が、あの「蘭亭序」を多分に意識した詩序を伴って存在したこと、しかもこの作品が三十二首の歌群で構成されていることなどから、先学によって高く評価されていることは前述の通りである。

たしかに、このような官邸という半ば公的な場所での大規模な創作活動は前例をみないものであったには違いないが、しかし前述のように、「梅花歌宴」が行われた天平二年（七三〇）から三百年以上も隔たった時代においてさえ、場所は大宰府政庁をわずかに隔つ安楽寺であるとはいえ、かつて旅人の官邸での歌宴と同じような規模の献詩が行われているのである。

とすれば、作品は現存しないとは言え、この「梅花歌宴」と

同規模な歌宴や詩宴が、大宰府庁の周縁で数世紀に亘って半ば公的な行事として行われていたと考えることは無理ではないであろう。こう考えると、この「梅花歌宴」三十二首についてもまた別の評価ができそうである。

その意味で、「梅花歌三十二首」の文学史的意味について、一考を要するのではないか。このような問題提起を行った所以である。

注1　校注、訳者　小島憲之　木下正俊　東野治之『万葉集』小学館　一九九五年

注2　中西進『万葉と海彼』第三巻　P四〇一―四〇二　講談社　一九九五年

注3　辰巳正明『万葉集と中国文学』P三六一　笠間書院　一九八七年

注4　林田正男『万葉集筑紫歌群の論』P四六　桜楓社　一九八三年

注5　上掲2　P四〇〇

注6　『東アジア万葉新風景』西日本新聞社　二〇〇〇年

注7　辰巳正明　上掲3　P三五九

注8　上掲2　中西進の訓読による。

注9　中西進　上掲2　P四〇四―四〇五

注10　晋の石崇の庭園の名。石崇はここに客を招き、詩宴を開き、詩ができない者には罰として酒三斗を飲ましたという。（石崇「金谷園詩序」）

注11　漢の武帝の築いた台（『漢書』武帝紀）

注12　高文漢『中日古代文学比較研究』P一七一　山東教育出版社　一九九九年

注13　上掲12による。

注14　「万葉集巻五梅花歌序の〈詩紀落梅之篇〉について」倉野憲司　国語と国文学　一九五九年二月

注15　「懐風藻より天平万葉の詩序へ」小島憲之　国語国文　一九五八年十月

注16　「落梅之篇―私見」小島憲之　国語と国文学　一九五九年六月

注17　上掲14による。

注18　『玉台新詠集　中』鈴木虎雄の訓読による。岩波文庫　一九五五年

注19　この資料の訳文、及び「梅花宴」との繋がりについては金原理先生の「都府楼の瓦色」〈田村圓澄編『大宰府　古代を考える』―　吉川弘文館　一九八七年〉のお考えを参考にした。

注20　土居光知『古代伝説と文学』P一六二　岩波書店　一九六〇年

注21　伊藤博『万葉集の歌人と作品　下』塙書房　一九七五年

注22　後藤和彦「梅花の歌三十二首の構成」伊藤博・稲岡耕二編『万葉集を学ぶ』有斐閣　一九七七年

注23　植垣節也『古典解釈論考』和泉書院　一九八四年

注24　上掲21　P一六八による。